命の礎 －と畜場が育む循環の場－

都市の片隅に、命が消える場所がある

命を奪い、命を育み、私たちの食卓を支えるけれど、

その存在は誰にも気づかれず

記憶にもとどまらない

閉ざされた壁の中で、命の声は消え、

やがて土地と知に忘れ去られただろう

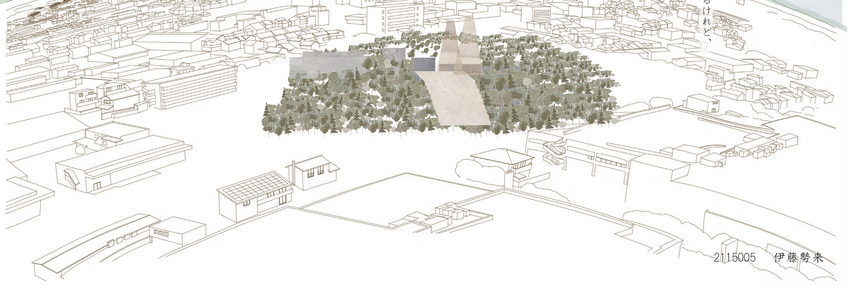
埋もれた地を掘り起こし、

その地層に刻まれた命を読み解く

祈りを編み、新たな命の循環を紡ぐ場所へ

静かに消えた命の記憶が

未来を繋ぐ礎となるように



21I5005　伊藤勢来

01 背景

人間は動物の命に依存しながらも、その存在を軽視し、生息地を奪い続けてきた。農業や都市開発の名のもとに、生態系は変容し、動物たちは人間の生活圏から排除されてきた。そして、害獣駆除という名目のもとで、多くの命が人知れず失われている。

食肉として消費される動物の命もまた、私たちの意識の外へと追いやられている。日常の食卓に並ぶ肉の背景には、と畜という行為があるが、その現場は都市の中で壁に囲まれ、隠された存在となっている。そこでは日々多くの命が失われながらも、その営みは都市において意識されることはほとんどない。

また、文明は過去の積み重ねによって成り立っている。かつてあったものは、歴史の中で埋もれ、忘れ去られていく。土地が埋め立てられ、新たな機能が与えられるように、都市は幾重にも「上書き」されながら成長してきた。しかし、その過去の層を掘り起こし、命の記憶を再認識することは、今後の社会を形作る上で不可欠である。

02 敷地　静岡県浜松市中央区上西町９８６（現：浜松市食肉卸売市場）　敷地面積：37500 ㎡

■2年後閉業すると畜場

浜松市食肉卸売市場は、静岡県内において食肉供給を担う重要な施設の一つであり、長年にわたり地域の食肉流通を支えてきた。しかし、本施設は2年後に静岡経済連小笠食肉センターとの統合が予定されており、閉業が決定している。これにより、静岡県内におけると畜場は小笠食肉センターへと集約され、本数地の役割は終焉を迎えることとなる。

■埋め立てられた土地

本数地は、かつて遠州灘に面した海域の一部であり、戦後の埋め立てによって造成された人工的な土地 である。浜松市南部に広がる工業地帯や物流拠点は、都市の発展とともに埋め立てによって形成され、本数地もその一環として誕生した。

04 提案

本計画では、と畜場の役割を継承しつつ、命の価値と循環を再認識する象徴的な場へと再構築する。都市の中で隠されてきたと畜の営みを可視化し、訪れる人々が命と食の関係を学び、体験し、祈ることができる空間を形成する。

ここでの「祈り」とは、食を通じた感謝の行為 である。特定の教人を信むのではなく、日々の営みの中で消費される命に意識を向ける場とするため、と畜場の機能を保持しつつ、学びや対話の場を設け、命の循環を体験的に理解できる構成とする。

また、かつて通だったこの土地の歴史を踏まえ、「埋もれた記憶を掘り起こし、命を見つめる場をつくる」という空間操作を行う。その象徴として、古墳のような地形を形成し、人々が訪れ、命と向き合い、循環の一端を担う場を構築する。

04 調査

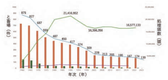
■歴史（と畜場）

動物を狩猟し、食肉として消費する行為は、生活に不可欠な要素であった。時代が進み、日本では仏教の影響で動物を殺すことが忌避され、食文化は都市から遠ざけられていった。江戸時代には、と殺は「エタ」と呼ばれる被差別移民の仕事とされ、都市から隔離される存在となっていた。明治維新以降、日本は再び肉食の文化を受け入れ、と畜場が制度化されて都市に戻ってきた。

▼

日常から離されてしまった「と畜場」

■現在(卒業研究調査より)



年々減少傾向にあると畜場数

3944人	1080体（1040＋40）

１日でなくなる人間と殺される動物（浜松市食肉卸売市場）の数

27ヶ所 ／ 167ヶ所

見学可能なと畜場数（日本）

▼

食育の観点から見たと畜場の在り方に関する研究

東三河

小笠

京都

名古屋

浜松

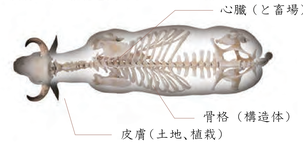
実際に５施設（東三河、浜松、小笠、名古屋、京都）見学をし、ヒアリング調査を行った。

多くの施設はブラックボックスで壁を作り、住民からの距離をとった形態が見られた。近年では、京都のような切妻のようなボリュームで壁をたてず、食育に積極的な施設も見られた。

浜松市食肉卸売市場（全体見下ろし型）　名古屋市中央卸売市場南部市場（見上げ型）　京都市中央市場第二市場（見下ろし型）

05 コンセプト

骨格と皮膚：命の記憶を支えるフレームと循環するレイヤー



骨格：命の喪失と記憶を支えるフレームワーク

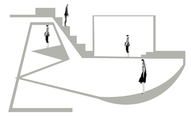
命の記憶を物理的に支え、空間を構成する主要なフレームとして存在する。と畜場という命の消失の場の現実を象徴し、命の記憶を掘り起こすための硬質な構造として表現される。

皮膚：命の循環と再生で包み込むレイヤー

骨格を覆い包む柔らかな層として存在し、命が失われた地に新たな循環をもたらす。掘り起こされた土や植栽が骨格にまとわりつき、命が土へ還り、次に命を育てる仕組みを体現する。

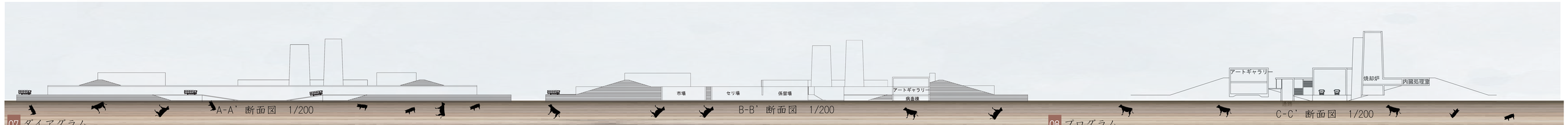
06 設計手法

リボン構造：命の循環と繋がり、空間を編む動的なデザイン



骨格と皮膚はそれぞれ存在するが、その両方をつなぎ、命の記憶を編み直す象徴的な存在となるのがリボン構造。

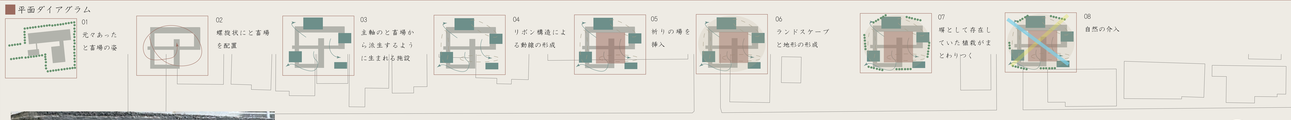
リボンは、スロープや壁、階段、建築などへと姿を変えながら、命の流れを可視化するデザイン。



A-A’ 断面図　1/200　　B-B’ 断面図　1/200　　C-C’ 断面図　1/200

07 ダイアグラム

■平面ダイアグラム



■ 敷地から得た形態

浜松市食肉卸売市場の搬入通路の軸線と、と畜場が建てられたことで、失ってしまった道の軸。これは、動物の軸線と人間の軸線を表しており、この２つの軸線を伸ばし、敷地内で交差することによって、２つが交わる象徴的な建築となる。また、動物動線が下、人間の動線が上になって交差することで、動物の命の上に人間の生活が成り立つといった今の社会構図を示している。

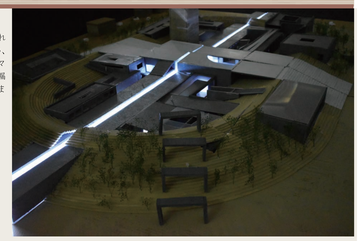
08 プログラム

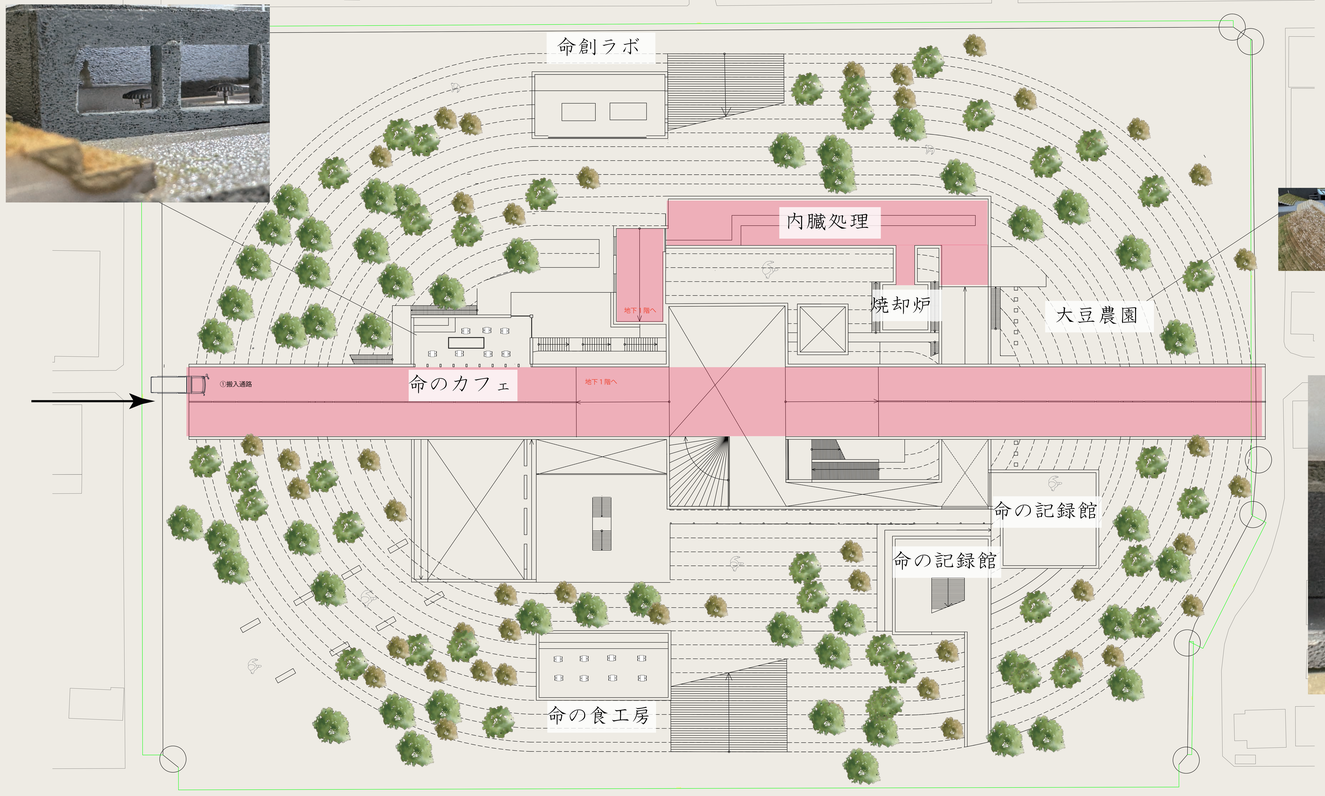
■「食」をテーマとした学び舎

命を消費する行為としての「食」を、祈り、感謝、循環の視点から再考し、学びを深める場を構築する。命がどのように生まれ、育まれ、私たちの生活に届くのかを体験的に理解し、食の背景にある命の記憶や価値を共有する。学び舎は、知識を得るだけでなく、食に対する感謝を行動として実践し、命の循環を未来に繋ぐ役割を担う。

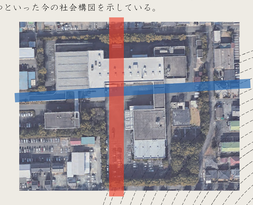
■ 浜松市の象徴的な場所へ

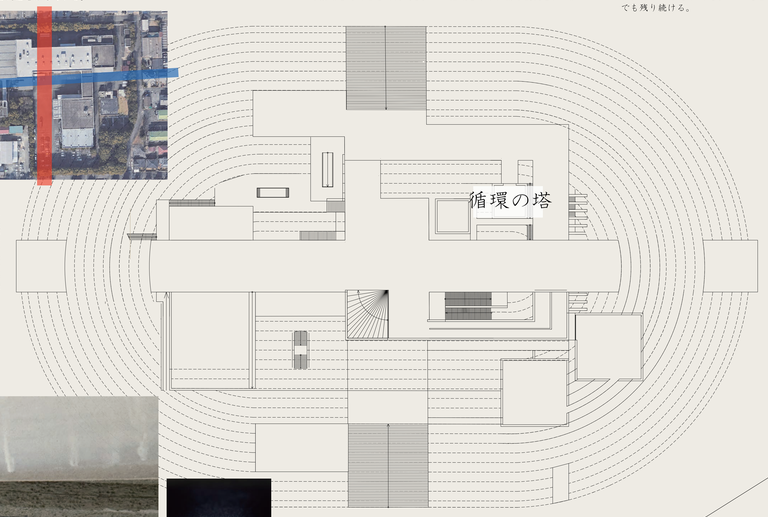
都市に埋もれていく（過去を掘り出し、これから先何年たっても、子の場所は命を殺い、死を学び生に向かうような場所となる。木々に囲まれたこの場所は搬入通路から光が漏れ、都市に埋もれても、命の通路はいつまでも残り続ける。



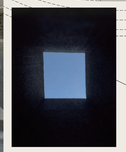


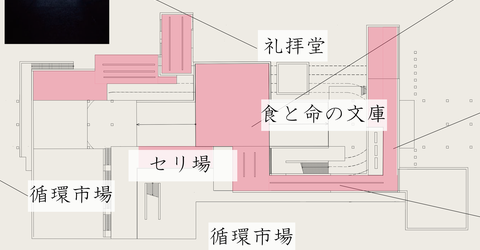
1 階平面図　1/200

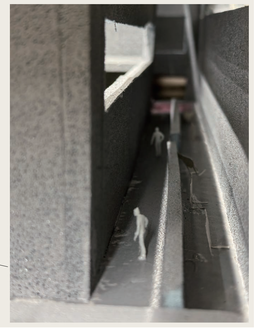




2 階平面図　1/300





N

地下１階平面図　1/300